

体験を自分なりの表現で

—複式低学年「元宇品探検」の実践から—

佐 和 真由美

1 はじめに

子どもたちは、楽しかったことやびっくりしたことがあると、それを何かで表現しようとする。活動や体験がわくわくするものであればあるほど、自分の思いをみんなに伝えたいという気持ちが、自然にわいてくるようである。また、表現するうちに、自分の思いを確かめたり再発見したりすることもあり、表現したもので自分の活動を振り返ることもきる。子どもにとって、活動や思考と表現は、切り離せない大切なものだと言えるだろう。

2 実践の概要

(1) 単元について

本単元の活動の場となる「元宇品」は、原生林が残る岬として市民に親しまれている。潮が引いた磯を歩けば、いろいろな貝殻やカニに出会い、裏山に上れば、大きなトトロの木が迎えてくれる。元宇品は、子どもたちが体験し、何かを感じ、自分の興味に応じて活動することのできる格好の場所である。

本学級の子どもたちは、夏に猿猴川、秋に元宇品探検を体験する。したがって今回の探検は、1年生にとっては初めての、2年生にとっては2回目の元宇品探検となる。共通の体験となる猿猴川探検では、泥の感触に歓声を上げながら、やどかりを探したり貝殻を拾ったりと時間を忘れて活動を楽しみ、心に残ったことを絵日記やクイズなどで表現していた。2年生は、これまでの体験から見通しをもって自分のしたいことや準備物などを考えることができるようになってきており、1年生は、2年生と活動を共にすることで自分のしたいことが次第にはっきりとしてきている。

(2) 学習のねらい

- 1 自然に対して積極的にかかわることができるようにする。
- 2 自分が体験したことを自分なりに工夫して表現し、共感し合うことができるようにする。
- 3 体験活動を通して自然のよさ（心地よさ、楽しさ）を感じることができるようにする。

(3) 活動内容と計画……………11時間

- 第一次 元うじなたんけんたいの計画を立てよう……………2時間
- 第二次 たん！たん！たんけんだ！！……………6時間
- 第三次 ぼくの・わたしの元うじな（表現）……………3時間（本時1／3時）

(4) 本時の導入にあたって

本時は、みんなで元宇品探検を振り返り、自分なりの探検をどのようにみんなに伝えるかという見通しと意欲をもつ場面である。ここでは、みんなに伝えたいことや思いがふくらむように、探検中の楽しかった活動やいろいろな思いを出し合っていくようにする。そして、この話し合いから自分なりの探検の発表方法を考え、意欲的に次時からの表現活動に取り組めるようにしていきたい。探検によって生まれた思いや気づきを自分なりに表現し、それを伝え合い認め合うことで、子どもが充実感や達成感を十分に味わい、次の活動への意欲を高めていくことができると期待している。

(5) 学習の展開

学 習 活 動	み と り の 視 点	教 師 の 働 き か け
1 元字品たんけんを振り返る。 ・楽しかったこと ・びっくりしたこと ・不思議だったこと ・おたずね ・おたすけ	○自分の探検にどのような気持ちをもっているか。 ○どのように自然のよさを感じ取っているか。 ○友達の探検にどのように関心をもったか。	1 振り返る手だてとして探検中の写真を掲示しておく。 ・同じ活動に対していろいろな思いがあることに気づくように板書をしていく。
2 自分の探検発表の方法を考える。 ・絵や作文・クイズ ・歌 など	○自分の探検をどのように表現しようとしているか。	2 ◎自分の気持ちを自分なりに表現できる方法を決められるように、子どもの考えを認め励ましていく。
3 探検発表への準備をする。	○次時の活動への意欲をどのようにもつことができたか	3 自分の探検をまとめその様子を伝え合うことで、表現の意欲を高めていくことができるようにする。

「ふしぎ・なぜかな」

えんこう川と比べて・・・貝の種類が違う、砂がさらさら
魚が釣れない、ペットボトルが戻ってくる、海藻が違う

「はっけん」

砂が遠くまでぬれている、山からの風のせいかな

「いいな」

水が冷たい、トトロの木がある、草のいいにおいがする

「つたえよう」

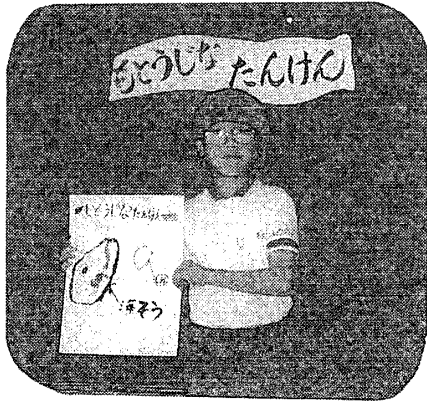
- ・本
- ・ずかん
- ・工作
- ・絵
- ・作文
- ・がっき

発表後、各自、探検で手に入れた自分の宝物や自分で必要だと思う大きさの画用紙などを使って、早速表現活動に取り組んだ。表現をしながら、自分の探検を振り返っているように見えた。そして、短い時間だが、次時からの表現への意欲を高めるために、制作中の作品を紹介した。

(6) それぞれの表現活動

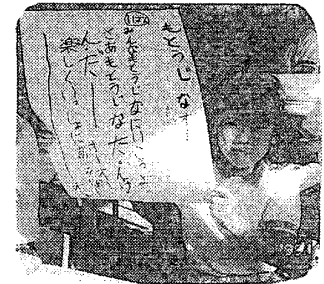
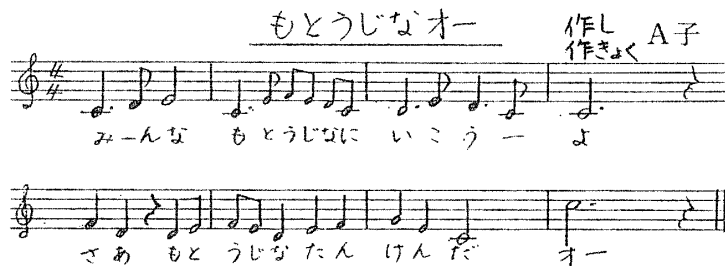


子どもたちの表情は真剣である。何とか自分の気持ちや様子を表そうと、時には頭を抱えている子さえいる。しかし、少しずつ形になってくると、自分の作品を見てもらいたくなり、近くの子と見せ合う姿が見られる。「うわあ、すごい。ねえ、みんな見て見て。」と言う賞賛の声に、ますますやる気を出し工夫を重ねていく。また、「それ、何なの?」と言う声に必死に説明をしている子もいる。こういう子も、自分の表現を分かってもらいたいという気持ちを強くもっている。こういう時こそ、教師が思いを引き出し、励ましていくことが大切だと考えている。



子どもたちの表現

本：開けば海で釣りをしている自分の姿が飛び出す。
 図鑑：クイズにして、ポシエットのようにさげて歩ける
 絵：砂や貝をはり、青い海と白い砂のきれいさを表す。
 紙芝居：探検での出来事をまとめる。
 歌と楽器とお面：貝で楽器を作り、海の風を表す。貝や
 海草のお面で、歌に合わせて劇ができる
 工作：海にゆらゆら浮かぶペットボトルで波を表す。
 工作と絵：望遠鏡でのぞくと元宇品が見える。 など



子どもたちの表現は多彩で、一つとして同じものはない。同じ本でも「僕のは、ここが工夫して人と違うところです。」と言えるようになってきた。自分に自信を持ち始めているからだろう。

(7) 場の工夫

作品として表現した後、発表することを大切にしてきた。ここで発表することが、もう一度、自分は何をどう感じて、どう表現したかったのかということ、自分自身が振り返るよい機会になっている。また、お互いのいいところを見つけ合うことで、満足感や充実感を味わうことができ、その後のそれぞれの活動へのよい刺激となっている。と考えるからである。

そして、いつでも作品を見合い、作品を通しての交流ができるような、作品展示の仕方も心がけている。

3 振り返って

探検の振り返りでは、夏のえんこう川探検の方が、「おもしろかった・楽しかった・へんだ・本当に」という思いや「ふわふわ・ぺちゃ・つるっ・ぺこっ」などの感覚を伴う言葉が多く出された。元宇品に行ってから1週間以上が経っていることを考えると、子どもが体験した後あまり間を置かずに表現活動に取り組むことが、体験に伴う感覚や感情を引き出しやすいと言えよう。

表現活動中も、できる限り子どもの活動を見守るように心がけてきた。表現に詰まった時が、その子が最も考えている時ではないか。と考えるからである。しかし、子ども同士の教え合いでは難しそうな時は、まず「何がしたいのか」を聞き取ってから、その子が自分なりの表現をしていけるようなアドバイスをしよう心がけた。教師が引っ張りすぎて、その子の思いと違うものにならないよう、しかし、その子が必要としている時に必要最小限のアドバイスができるよう、常に子どもの様子を見とっていかねばならないと思っている。

子どもたちの作品の意図を聞いてみると、表現をすることで、自分の探検中の気持ちを思い出したり、活動そのものを振り返ったりしていることが分かる。また、発表を終えた後の子どもたちの晴れ晴れとした表情からは、表現することが楽しいという気持ちが伝わってくる。表現することの大切さや楽しさを子どもたちが教えてくれているのである。これからも、自分で考え、自分で決めて、自分なりの方法で自分を表現していけるように、実践を積み重ねていきたい。